統一思想と倫理の根拠

（英文より翻訳）

渡辺　久義

I

最近（2002 年 5 月）私は『善く生きる』（*Living a Good Life*）、副題を「『人間学』の基礎と倫理の根拠」（*Establishing "Humanology" and the Ground of Ethics*）という本を出版した（世界日報社）。主題の方はプラトンの対話篇『クリトン』にある有名な「（肝心なことは）ただ生きることでなく、善く生きることだ」という言葉から借用したものである。

この本は、前著『意識の再編――宗教･科学･芸術の統一理論を求めて』（勁草書房、1992）以来、私の暖めてきた哲学的な構想を体系的に述べようとしたものである。これを書くに際しての私のひそかな狙いは、統一思想がなるべく多くの人に受け入れられるようにするための道をつけることであったと言ってもよいかもしれない。とは言っても、私がこの本の中で統一思想を紹介したとか、あるいは言及したということでさえない。しかし私の試みは、人々が統一思想になじむことができるように、人々をいわば条件づけようとすることであった。というのは多くの人は、たとえ統一教会に特に反対していなくても、このような思想は強く教義を押し出したものであろうから従って信用できないだろうと考えて、警戒するかもしれないからである。

私は議論を「人間とは何か」という基本的な問いによって始めるのが最善であろうと考えた。なぜなら、自分自身の存在についての何らかの基本的な合意が、我々の仮想敵である唯物論者をも含めてすべての人の間にもしなければ、議論が始められないだろうからである。周知のように統一思想は、この世界が存在するためには何らかの神的起源がなければならないという仮定から始まっている。しかし一般の人々、そして間違いなく日本人の大多数は、明らかに唯物論的な教育を受けているがゆえに、そのような考え方をするように条件づけられていないのである。

だから我々に要求されることは、唯物論や唯物論的な人間観の間違いを明らかにすることである。それは根強くはびこっていながら、どうやらそういうものとは感じられていないのである。統一思想は確かに唯物論を論駁する。しかしその議論は本の始めに置かれてはいない。今日、知識人や学者も含めて人々の一般的な考え方の前提は、強く唯物論的である。しかし人々は通常それに気付いていないがゆえに、それが事態を一層悪くしている。彼らは自分たちの考え方以外に、この世界の現実を見る見方があるなどとは認めたがらないが、それはひとえに、彼らには他にものの考え方ができないからである。そこに我々がまずもって対処しなければならない障害がある。

人々を目覚めさせることが絶対的に必要となる。なぜなら今日大多数の人が、技術方面ではきわめて活発で巧妙であるのに、哲学的には半ば眠っているか麻痺しているからである。この哲学という最も我々にとって基本的で親密であるべきものが、最も我々に無関係なもののように思われているのは驚くべきことである。この哲学的問いを問うことができないということが、それ自体我々の時代の唯物論的精神風土の一つの兆候である。

II

そこで我々には、この時代のこの一般的風潮に対処するための何らかの戦略がなければならない。この一般的な思想的前提は無意識であるがゆえに最も厄介なものというべきである。私の取った戦略は、我々の与えられているこの現実世界と芸術作品との間に並行関係が存在することを示すことであった。我々の生きるこの世界も、芸術作品、例えば一篇の詩も、解釈されねばならないものである。すなわち我々の解釈なしには意味をもつことができないものである。それらは我々がいなければ、我々が制作者の心に参加しなければ、無であると言ってよい。そのどちらも、それ自体で意味をもつ構築物として我々に与えられてはいない。

この類推は確かに統一思想でも用いられている。しかしこれには、そこで述べられているよりも深い意味と有用性がある。私の言うことは唯物論者でさえ受け入れなければならないはずだと言いたい。というのは、我々の世界が我々自身をも含めて、ともかくも作られたものである以上、制作者という観念はいわゆる創造者でも、非人格的な機械的な作用者でもありうるからである。そして解釈という概念には、我々の世界の機械論的・科学的解釈も含まれうる。ただ唯物論者は、この世界の機械論的・科学的解釈が唯一の解釈でなく、一つの解釈であることを認めなければならない。

我々が与えられそこに生きている世界が芸術作品に喩えられうるのは、それらがともにヒエラルキー（階層）をなす生きた構造物であるということ、すなわち、それらは多くのレベルからなる存在であり、最も基底の物質的（非生命的、物理的）レベルから、より物質的でない、より精神的（生命的、形而上的）な存在のレベルへと上昇し、最も上のレベルには、純粋に霊的な実在（創造力）が想定されなければならない、というところにある。一つの全体としての宇宙も、芸術作品（たとえば一篇の詩）も、そのような多くのレベルからなる階層的な構造物である。

この存在のヒエラルキー構造――かつてA・O・ラヴジョイが「存在の大いなる連鎖」と呼んだもの――は、私が前著でも今回の著でも、単に生物学的にでなく広い意味において生きていると言えるあらゆるものに共通するものとして、詳しく説明したものである。それ

ゆえこの芸術作品と宇宙との類比はまた、最も典型的に、芸術作品と、最も高い霊的な生命体としての人間との類比でもある。この人間はマイクロコズム、すなわち宇宙を代表する小宇宙といみじくも呼ばれる。

もしこの類比が確立されうるならば、唯物論的に偏向した人々に、存在の精神的（霊的）レベルがあるとういうこと、物理的空間を占めることなく存在するものがあるということを納得させるまでに、あと一歩であるはずである。おそらく誰ひとりとして、詩や音楽作品の非物理的な、霊的な存在様態の実在を否定する人はいないであろう。すべての人が詩や音楽作品が身体と霊からなること、すなわち、より肉体的で目に見える存在レベルと、より霊的で目に見えない存在レベルの、二面からなっていることを認めるだろう。

それだけではない。芸術作品はその鑑賞者から離れて一人で存在するものではない。それらを享受する人々の感情移入能力に応じて、その意味をいくらでも変えるものである。もしだれもそれに関心がなければ、それは存在することすらできないだろう。同じことは我々がそこで生まれて死ぬこの宇宙についても言える。もし我々が機械的な精神しかもっていなければ、宇宙は我々にその機械的な側面をしか示さないだろう。そしてちょうど一篇の詩がその構成要素、つまり単なる単語や文字やインクのシミの集積――それが詩の存立にとって不可欠であるとはいえ――に還元して考えることができないように、この宇宙もそれを構成する基本的素材、つまり物理的諸科学の対象となるもの――それが重要でないとは決して言わない――に還元して考えることはできないのである。

私の本は私自身の哲学体系を論述したものである。しかし同時に、それは偏見をもった人々が、統一思想をよりたやすく受け入れられるように仕向けようとする意図をもって書かれたものである。この思想の中心をなすものの一つは、世界は身体と心からなる複合体であり、その排他的な形での唯物論も唯心論も否定するという思想である。私は芸術作品と宇宙そのものの構造的類似性を示すことによって、だれでも統一思想に入っていくことが容易になるのではないかと考える。この構造的な類似性あるいは並行関係は、いかなる芸術作品も作者つまり芸術家なしには存在しない以上、当然、ヒエラルキーの霊的頂点における創造者の観念へと人を導くはずである。

生きていると言うことのできるすべてのものは、程度の差こそあれ構造的に類似しているが、この類似性が最も顕著なのは、人間存在と芸術作品の間においてである。なぜなら我々は我々の物質的基底を、動物的、植物的、鉱物的レベルに根ざしている霊的存在だからである。もし我々が死ねば、我々はたちどころに無機物質に還元されてしまう。反対に、人間を創るためには宇宙的な時間を要したのである。このことは人間存在が空間的のみならず時間的にも宇宙の縮小体であることを示している。この類比は、いずれの場合において

も、創造ということが精神としての創造者の恐るべき努力を必要とするのであって、構成要素の単なる機械的積み上げではないという点でも真実である。

もし我々がこの類比の正当性を唯物論者――たいていは無意識の唯物論者――に納得させることができるならば、我々は人間存在というものが、たいていの人がそう信じて疑わないような――とはいっても、もっと説明せよと言われれば頭を抱えるであろうが――単なる偶然と自然選択の産物ではないということを、納得させることができるのではなかろうか。少なくとも彼らは、自分自身が分子や細胞の単なる集積だとか、「原始スープ」の最終産物だとするような考え方をやめるはずである。彼らはまた、彼らもその存在を否定できないはずの、自分自身の存在のより高い、霊的なレベルを、下から、つまりより下位のレベルの機械的働きに置き換えて説明することの愚かさを認識するはずである。むろんこう言ったからといって、分子生物学のような「生命科学」の重要さを否定するのではない。

ダーウィン主義者は依然として多数存在する。それは我々の時代の執拗な唯物論的精神土壌の証左でもある。なお悪いことに、生命を機械として解釈する人々のある者は、かなりの影響力を持つらしいかのリチャード・ドーキンズに代表されるように戦闘的である。しかし、大多数の人間が、全く疑問に付すこともなく、ある基本的な想定に固着し続けるかぎり、ダーウィニアンが戦闘的であるのは当然のことである。彼らの挑戦的な「それ以外にどうそれを説明できるというのか」という問いは、この想定の上に立つかぎり正当である。このことから我々は更に深い存在論的問いかけへと導かれていく。

Ⅲ

生命とは何か。この昔から問われつづけてきた問いが、今ほど問われるに値する時代はない。なぜなら我々は、無意識的に身についている唯物論的な観点から、この問いに答える習慣がついているからである。もし「ダイアモンドとは何か」と問われれば、我々は通常（もし知っていれば）炭素だと答える。それは我々が分析的に考えるように、また分析ということが事の核心にいたる道だと考えるように訓練されているからである。しかしこれは生命にも当てはまるだろうか。私の知るかぎり、大多数の生命科学者は当てはまると考えている。そして市井の人々はこれら専門家の顰（ひそみ）にならう。なぜなら彼らは素人であり、このような「難しい」問題に口出しする資格は素人にはないからである。

しかし「生命とは何か」という問いは、実は科学者の問いであるより前に哲学の問いである。根本的に考えれば、生命とは対象化されうるようなものではない。我々は生命を持つとは言えない。我々が生命である、あるいは生命の一部であるからである。我々の生命に先立つ我々の存在などというものはナンセンスである。生命とは何かを言うことは全く不可能である。ただ研究を通じて我々に言うことができるのは、生命を物質的に可能にして

いるのは何か、ということだけである。科学的に知ることができるのは生命の物質的側面だけであって、その全体ではない。別の言い方をすれば、物質は生命の必要条件ではあるが十分条件ではないということである。

このことは我々を根本的な問い、すなわち「我々が与えられているこの現実の存在論的基底は何か」という問いへと向かわせる。それは物質であるのか、生命であるのか。物質が生命に先んじて存在するのか、それとも生命が物質に先んじて存在するのか。生命とは目に見えないが、確実に存在するもの、しかしそのために空間を占めることなく存在するものである。この存在論的先行の問題は、厳密に二者択一の問題であって、中間的あるいは折衷的な選択というものはない。これはまず始めにすべての人によって確認され合意されねばならない事柄である。

そこで私は、唯物論者に対して公平を期すために、次のような命題を掲げて誰でもこれを取るなり拒否するなり自由であるとした。

「眼よりも先に見るということがある／あった」

この文章は単純かつ象徴的に、我々の宇宙の神秘というべきものを表現している。唯物論者はこの逆命題を選ぶはずである。すなわち「見ることより先に眼がある／あった」と言うであろう。私は読者に対して、これら二つの命題から自由に選ぶように、決してどちらをも押しつけはしないという戦略を取った。私はどちらの命題も神秘であって、我々の通常の理性に反するということ、そしてこれの判断は我々の力の及ばぬところにあり、従ってこれは仮説の選択の問題であって真理の選択ではないということ、そして仮説の価値の優劣はその包括力、すなわち、いかに単純な原理でもっていかに多くの事象を説明できるかにあるということを強調した。

Ⅳ

ここから我々は進化の問題へと導かれていく。なぜなら進化とは実は存在論的優先性の問題だからである。生命は物質から出てくるのか。それとも生命はすべてに先立って存在し、存在してきたのか。いかなる進化の説といえども、理論作りをする前にこの哲学的選択を避けるわけにはいかない。そして強調しておくべきことは、ダーウィニズムはこの選択を、あたかもそんな問題は存在しないと言わんばかりに、無視しているのである。ダーウィニアンが総じてあれほど戦闘的なのは、単に彼らが「物質が生命に先行する」という以外のいかなる選択肢も考えることができず、考えてみる気もないからにすぎない。

ダーウィン流唯物論の、生命がともかくも物質から生じたのだとするこの当然のような仮定を、黙ってやりすごすことはできない。なぜそうでなく、生命が初めから存在したと仮定することができないのか。ただ最初は目に見えぬ形で、次には原始的な生命体として、

それから次第により高い生命体として。もしこの仮定が神秘であるとして一蹴されるなら、我々は生命が物質から生じたというより大きな神秘を受け入れねばならず、これは神秘的というより不気味というべきである。

私はどの仮説を選ぶべきだとは言わない。よりよい仮説を選ぶべきだと言っているのである。それでは、いったい、生命自体は目に見えないところから、潜在性として初めから存在し、すべてに先立ってあるものと考えられる生命とは何であろうか。すでに提起した象徴的公式「眼よりも先に見るということがある／あった」を考えてみよう。「眼がなくてどうして見ることができるのか」と我々の常識は言うであろう。しかしそれなら「見ようとする意志もないのにどうして眼が生ずることができるのか」と、全く同等の権利をもって反問することができる。

「盲目の機械仕事」とか「純粋の偶然」といったタワゴトともいうべき説明に騙されるほど愚かでないかぎり、我々は生命というものを心（意識）と不可分のものとして、いわば「生命=意識」として考えなければならないだろう――意識はこの場合、存在論的に脳に先立つものとして。もしひと度、すべてに先立って存在するものとしての「生命=意識」というようなものを措定するなら、我々誰しもが必然的に神の観念――創造者であり創造力である神の観念――へと導かれるであろう。統一思想ではこれは「原意識」proto-consciousness と呼ばれ、「原映像」proto-image と一緒に論じられている。

> すでに説明したように、原意識は生命体の細胞や組織に浸み込んだ宇宙意識であり、すなわちそれは生命である。そして原映像は意識のフィルムである原意識に写された映像である。原意識とは目的をもった意識であり、原映像は情報にほかならない。1

それではこの常にすでに存在する生命あるいは生命=意識とは何であろうか。明らかにそれは自己実現の意志をもったもの、何らかの目的と設計をもったものである。それは成長し生成し、創造意志をもって創造する何ものかである。この観点から進化という概念は再定義されなければならない。生物学的な複雑化と機能の精密化といった従来の概念でなく、それは宇宙意識の発展として、ちょうど赤ん坊の意識世界が、成長につれて拡大され、精妙化され、明瞭度を増していくようなものとして考えなければならない。進化とは、宇宙の生命=意識がより大きな意識世界へ、より大きな目覚めの状態へと進んでいく過程である。身体のシステムの複雑化というのは、このことを可能にする手段にすぎない。

ところで、宇宙の生命=意識がより大きく目覚めていくとはどういうことを意味するのだろうか。より高い知能を持つようになるというだけでは不十分である――人間が動物や爬虫類より知能が高いのは確かなのだが。明らかにそれは、より自己中心的でなくなるという

ことを意味している――ちょうど新生児が幼年期から青年期へかけてより自己中心的ではなくなるように。人間の出現に伴って初めて現われた言語そのものが、自己中心性からの脱却をよく表している――自己中心的あるいは主観的言語などというものはないのであるから。主観的科学あるいは主観的数学などというものもない。これに対して動物の本能は主観的言語だと言ってもよい。

仏教の訓練というのは、自分の陥っている暗く、主観的で、自己中心的な世界から脱け出し、より高く、明るく、より大きく目覚めた客観的な世界へと向上する訓練である。それはブッダという語が「大きく目覚めた者」を意味するという事実からも明らかであろう。ここで強調すべきことは、仏教の訓練は宇宙の進化の向かう方向と一体をなす訓練だということである。宇宙の生命=意識そのものが、漸次より高い生命体を通じ、そして最終的に人間を通じて、自己中心性を脱し、より高い目覚めの方向に向かおうとしていると考えられる。例えば、恐竜と呼ばれる爬虫類がこの地上を支配していた時代は、宇宙の生命=意識がまだ半ば目覚めただけの時代であったと解釈できるだろう。世界のより高度な宗教はすべて、人間はもともと彼らがいま現にあるよりも、もっと大きく目覚めた存在であるべく意図された存在であり、どのようにしてか、その最初の状態から堕落したものであることを知っていたと思われる。

我々の自分を向上させようとする努力はすなわち宇宙そのものの努力であるということ、このことは深く銘ずべきことである。我々が高い目標を目指して努力するとき、我々は宇宙的生命、すなわち神と一体をなして努力しているのである。自分を向上させるということは、自己中心性を脱却するということである――いかにそれが我々にとって難しかろうと。そのように解釈したときにのみ、人の生命は十全の意味をもつことができる。それは単により賢くなったり豊かになったりすることでなく、その言葉の通常の用法において、より文明化されることですらない。そして再三にわたって強調されねばならないことは、唯物論的な仮説の選択からは、我々の人生のいかなる意味も、努力の目的も、決して引き出すことはできないということである。我々の時代の問題のすべては、行くべき方向を示すことができないという、その一事から生ずるのである。

V

倫理や道徳の概念は、それが宇宙の意志の中に内在するものだということ、また我々は宇宙的努力に参加しているのだということを、我々が理解したときに初めてその十全の意味に達することができる。我々は自分で勝手に自分の存在の目的や意味を発明することはできない。すべてこういったことは、アリストテレス的な目的論的世界観を何らかのやり方で再評価し復活させることが絶対に必要だということを意味している。統一思想の世界観がまさにそのような世界観である。

我々現代人は、現代科学が考えるように考える習慣をもっていて、目的論などというものを過去の時代のナンセンスだと考えがちである。しかし是非とも知っておかなければならないのは、目的論的世界観は、何ら近代的な機械論的世界観と矛盾するものではないということである。というのは、目的論は機械論を何の差しさわりもなく包み込むことができるが、その逆は不可能だからである。なぜなら前者がより包括的（すなわち全体論的）な宇宙解釈であるのに対して、後者は排他的で目的論に対しても、自己と不調和な他のどんな考えに対しても敵対しなければならないからである。これは要するに、生命は物質を含むことができるが、物質は生命を含むことはできないということである。

今日大多数の科学者がその本性上、目的論に対して軽蔑の態度を示すが、目的論というものをまさに科学の名において支持しあるいは支持するようになった先覚的な科学者もいる。物理学者のジョン・ホイーラー（John Wheeler）は、Barrow & Tipler の *The Anthropic Cosmological Principle* への序文の中で次のように言っている。

> 昔の科学者が正しかったのだ。意味が重要であり中心的でさえある。人間が宇宙に適応しているだけではない。宇宙が人間に適応しているのである。この宇宙の基本的な無次元の物理常数のどれか一つでも、ほんの数パーセントでも多かったり少なかったりしたと仮定してみよう。人間は決してそのような宇宙に出現してくることはできないだろう。これが人間原理というものの中心点である。この原理によれば、一つの生命を与える要因が、世界の全機構および設計の中心にあるのである。2

物理常数のすべてがビッグバンの初めから、将来、人間と人間に最も適した環境を作り出すために「微調整」されていたのだといういわゆる「人間原理」は、受けるべき正当な注目をいまだ受けていないようである。しかしこれは哲学の革命を意味するがゆえに、我々の時代の最も革命的な発見である。すなわちそれは目的論の復活ということ、「一つの生命を与える要因が、世界の全機構および設計の中心にある」ということを意味するのである。

生命=意識と物質のどちらが世界にとってより基本的であるかという、私の提起する選択が、今や避けることのできないものとなった。いかに気が進まなかろうが、科学者はいま唯物論者であることをやめなければならない。神という観念に対して、あるいは存在論的に先立つ生命=意識という観念に対して、冷笑的であるという愚をやめなければならない。もし彼らがそれをやめるなら、いま我々の時代に必要不可欠な、無意識の哲学の変革への多少の希望が見えてくるかもしれない。

その啓蒙的な著である『創造者と宇宙：いかに今世紀最大の科学的発見が神を顕かにした

か』（*The Creator and the Cosmos: How the Greatest Scientific Discoveries of the Century Reveal God*）の中で、物理学者のヒュー・ロス（Hugh Ross）はこう言っている。

> 宇宙の特性を研究する研究者たちとの会話において、またこの問題についての論文や著書を読んだ私のすべての読書経験において、ただ一人として、宇宙がいかにしてか生命のために適した環境となるように考案されたという結論を否定する人はいない。天文学者というのは本性上、独立不羈で偶像破壊的傾向を強くもっている。少しでも意義を唱える機会があれば、これを捉えようとする人たちである。しかしこの宇宙の微調整とか注意深く考案されているという問題については、あまりにも有無を言わさぬ証拠があるために、これに反論する人のことを私はいまだかつて聞いたことがない。・・・
>
> しかしながら昨今起こっているのは、生命を支えるための宇宙の設計ということについて天文学者が論ずるようになったというだけではない。次のような言葉が使われる：「誰か自然を微調整した者がある」「超知能」「いじった（monkeyed）」「圧倒的な設計」「奇跡的」「神の手」「究極の目的」「神の心」「絶妙の秩序」「きわめて微妙なバランス」「著しく巧妙な」「超自然的作用者」「超自然的計画」「誂えて作った（tailor-made）」「至高の存在」「摂理的に考案された」――これらは明らかに一人の人間について使われる言葉である。単に創造者が一つの人格であることを明確にしただけでなく、この設計についての発見は、その人格がどんな人格であるか、その特徴を示す証拠をも与えてくれるのである。3

ここで「創造者が一つの人格である」のみならず、「その人格がどんな人格であるか」も明らかにされたと主張されていることは、強く統一思想を想起させる。統一思想は徹底して「その人格がどんな人格であるか」についての教えだからである。

VI

我々は古くて常に新しい問題へと連れ戻される――「生命とは何か、人間とは何か、人は何をすべきか、いかに生きるべきか？」今日求められているもの、しかも猶予できぬものは、我々の無言の仮定のコペルニクス的転回、受け入れられている仮説の偏見抜きの吟味である。倫理は人間存在の正しい解釈に基づいていなければならない。人間存在の正しい解釈は生命の正しい解釈に基づいていなければならない。そして生命の正しい解釈は哲学的選択の問題であって、実証主義的推論の問題ではない。そのすべては我々が最初にいかなる仮説を選択するか、「見ることが眼に先立つ」のか「眼が見ることに先立つ」のか、すなわち存在論的優先性の選択にかかっている。そして結局のところそれは、どちらの仮説がこの現実のより多くの事象を、より強力に統一する原理でもって、説明することができるかという問題に帰着する。

現代人のソフィスティケートされた精神は「真理」として提起された真理を受け入れることができない。そこで戦略的に、唯物論的仮説を、必ずしも間違った仮説と呼ぶのでなく、貧弱な、より使いものにならない仮説と呼ぶことにしよう。ところで注目すべきことは、宇宙と人間存在に関するこの貧弱な仮説は、我々の行動のためのいかなる指導原理をも決して生み出すことができないということである。一つの国民が全体として、この哲学的選択に無関心であるということは一つの犯罪であろう――通常、人々はそのように感ずることはないのだが。このことは殊更に唯物主義を取る北朝鮮や中国のような国家に、明らかに現われている。これらの国家では、政府が特製の道徳規準を提供しなければならない。外から強制されたもの以外に道徳規準というものはありえないからである。

倫理は、それが人間存在の宗教的解釈に基づいていなければならないという意味において、宗教的でなければならない。日本のような非宗教的な共同体では、倫理は存在するかもしれず、ある程度は機能するかもしれないが、それは近年その明らかな兆しが現われているように、早晩破産する運命にある。「非宗教的」と私が言うのは、「哲学をもてぬほどに浅はかな」あるいは「霊的（精神的）に発育不全の」という意味である。倫理とは、何をなすべきか、いかに生きるべきか、ということの社会的基準である。そしてそれは個人のみならず国家そのものの行動の原理である。それは個人と国家双方のための最も基本的な指導原理でなければならない。当然のことながら、国民が全体として「人間とは何か、私はどこから来たのか」というような問いを問うたことがないような国では、それがうまく機能することはないだろう――あたかもそんな問いを問うのが恥かしいことであるかのように、宗教の匂いのするものは何であれ慎重に関心の外へ押しやらねばならないかのように。

一人の人間としての責任の観念といったものは、非宗教的国家では決して育つことがないだろう――責任ある地位にある人の責任観念は異常なほどに発達するかもしれないが。人間というものが、たとえ無意識にであろうと、単なる自然的過程の自然的産物として解釈されているようなところでは、責任の観念はただ仲間としての他者に関わるだけのものでしかありえない。これに対して人間存在が、宇宙的生命=意識のなかに根をもつものとして、ある至高の、目的を有する存在から切り離されぬものとして解釈されているところでは、人々の責任の観念は何よりもまず、彼らの心の奥深くに生きているその至高の存在に関わるものであろう。

更に言えば、宇宙的生命=意識は成長する何ものかである。何にせよ、そのものが成長するとは、何か目標をもつということ、何か実現すべきものをもつということである。では宇宙生命=意識が宇宙的成長の過程で、我々人間を通じて初めて「自由意志」を実現したとき、どんな目標がそこにあったのだろうか。それが現われる以前には本能しかなかったのだから、従って倫理などというものはなかったのだから（動物に善悪はない）、「自由意志」の

出現は必然的に、人間としての責任すなわち倫理を前提とするだろう。そしてこの責任と一体となった「自由意志」は、我々人間にとって最も重要な意味をもつものでなければならない。我々は自らを制御するように、自らおのれの主人となるように、動物よりもより近く神の立場に立つべく、意図された存在なのである。我々は自分自身の内深くに、倫理道徳をインプットされて生まれてきたのである。

我々自身についてのそのような理解は、最初の二者択一の仮説の、正しい選択からしか引き出すことができない。もう一つの存在論的選択、唯物論的仮説からは、全く正反対の人間像が引き出されるはずである。すなわち我々自身のサタン的あるいは侮蔑的像と、外から押し付けられ従って反発すべきものとしての倫理像である。今日、日本でもアメリカでも見受けられる、右翼と左翼、あるいは保守とリベラルといった二つの陣営間の闘争は、すべてこの最初の二者択一の、存在論的仮説の問題にまで遡ってこれをみなければならない。そうしないかぎり、すべての議論が空しいことになるであろうし、論点がはっきりせず、自分が何を主張しているのか実は自分でもわからない、といったことになるだろう。

その点がまさに、統一思想が明確な見通しを与えてくれるところなのである。とはいっても私はここで、統一思想を逐語的に紹介しているのではない。例えば忍耐というものは、この観点からでなければその十全の意味を知ることはできないだろう。忍耐は人間に要求される最大の徳の一つであって、それをあえてけなす者がいるとは思われない。因みに、いま中国で地下運動となっている宗教団体の「法輪功」では、「忍」は「真」「善」と並んで人間の実践項目の三つの柱の一つとなっている。

しかし、この忍耐の意味が我々の宇宙像から導き出されたものでなければ、なぜそれが我々にとってそれほど大切なものであるのか、あるいはそもそもそれが大切なものであるか否かさえわからないであろう。これこそ明らかに、今の世相の大きな混乱の根元にある問題である。保守陣営はふつう忍耐を主張するが、それが伝統的美徳だという以外に、彼らはその理由を知らない。自由主義陣営はおおむねその重要さに懐疑的であり、それにはっきり異議を唱える者もある。しかし彼らも同様に、どうしてそんな伝統を重んじて欲望を制限しなければならないのか、という以上には、なぜ自分がそれに反対なのかわからないのである。

我々の仮説は次のようなことであった――。この宇宙は機械作用としてでなく生命=意識として、目覚めの過程すなわち進化の過程にあること、それは自己中心性を脱却するという方向性をもつこと、そして最後にそれは人間存在を通じて自己実現をした、あるいはしつつあるということ。従ってこの大きな宇宙の方向性が、倫理、あるいは自己および他者ともに対する責任として、あるいは、おのれのより自己中心的な面を克服し、無私の面を発

達させる責任として、我々人間の中にインプットされているということである。美徳としての忍耐はこのような見方をしたときにのみ、その十全の意味を獲得するのである。もし目的というものがなければ、耐えるということは耐えられないものとなるだろう。

Ⅶ

倫理の感覚、すなわち生き方の方向感覚は、人が自分より偉大な何ものか、しかもそれ自体方向性をもつ何ものかの中に根ざしているという感覚をもつときにのみ、生ずることのできるものである。このことから神と愛の真の観念が、我々の存在の中心的事実として、自然に導き出されるであろう。自己中心的なあり方の領野から脱け出して、より無私の、客観的なあり方の領野へと移行するということは、愛を実現するということ、あるいは少なくとも愛の実現の方へ向かうということにほかならない。この愛は人間中心の愛でなく、それが絶対的な宇宙の動きの我々への反映であるという意味において、神の絶対の愛である。愛の観念は宇宙の正しい解釈に基づいたものでなければならない。さもなければ、それはどんな目的のためにでも好きなように利用されるだろう。現に今それは、いたるところで唯物論者や無神論者によってさえ利用されているのである。今日の世界のすべての混乱は、浅はかな宇宙理解から発しているのである。

それは性道徳の問題に最も鋭く現われている。もし愛が人間的レベルの内部で自己完結しているものと解釈されるならば、強姦を除くあらゆる性行動が愛の名において許されることになる。唯物論者や無神論者が無制限の性的自由を推進しなければやまない理由は、理解できる。それは彼らのそもそもの初めの宇宙解釈の選択が、我々とは正反対の愛の解釈、すなわち人間中心的な、それどころか私=中心的な愛の解釈を彼らに強要するからである。我々のなすべきことは従って、真理の名において彼らを論駁しようとするよりも、むしろ彼らが無意識のうちに、いかに貧弱な仮説の上に立っているかに気付かせることであろう。彼らのも我々のも等しく仮説である、よろしい、しかし君はどちらをより有効で有能なものとして選ぶのか、ということである。

進化ということを生命=意識のそれとして考えることによって、我々の縛れた思考が最も明快に解きほぐされるのは、性の問題に関してである。動物には発情期（交尾期）があって彼らはそれに拘束されているのに、なぜ我々人間だけがそれから解放されているのであろうか。それは我々が他の動物より多く楽しむために、利己的な理由から、努力して自らを解放したということであろうか。そうではない。我々は自分を作ったのではない。創造されたのである。そして我々は発情期から自由であるように、従って自分自身に対しても他者に対しても性的に責任をもつように、創造されたのである。動物は自由ではないがゆえに責任もないのである。まさにこれが性道徳の起源である。

この観点は統一思想において明確に示されている。それだけではない。統一思想は、男女（陽陰）の別は神の性質として宇宙に初めから存在するものであるということを、中心的教義として教えている。それはまたこの神の性質が、人間の結婚した男女に具現化され、そこに神聖にして侵すことのできない性格を与えていると教える。そのような観点からでなければ、いま地球全土にわたって最も緊急の問題となっている性的問題を解決することはできないだろう。今日の無意識のダーウィニアンたちは、男女の別というものが、どうにかして生物進化の途上で現われたものと漠然と考えているかもしれない。しかし、この考えは我々の理性に反するばかりでなく、それは我々の社会を止めどもない性的堕落の底に投げ込むものだということを彼らは認めるべきである。

最後に正直に告白するなら、私が十五年ほど前、初めて故李相軒博士から統一思想の講義を聞いたとき、特に深い感銘を受けなかった。しかし時とともに、また私の理解が深まるとともに、それは私にとってますますその価値をあらわすようになった。そして今私は、世界的な統一思想の受容のみが、今日いたるところで我々の直面する深刻な問題を解決することができると確信している。私の著書は、その受容を少しでもた易くするために私の提案する試みである。

注

（Ｉ）統一思想研究院『統一思想要綱（頭翼思想）』（光言社、1994）p. 377.　訳文をやや改変した。*Essentials of Unification Thought: The Head-Wing Thought* (Unification Thought Institute, 1992) p. 339.

（２）John D. Barrow & Frank J. Tipler, *The Anthropic Cosmological Principle* (Oxford University Press, 1986) p. vii.

（３）Hugh Ross, *The Creator and the Cosmos: How the Greatest Scientific Discoveries of the Century Reveal God* (NavPress, 2001) pp. 160—61.